人狼／*Le Loup-Garou*（1970）／ボリス・ヴィアン（長島良三訳）／早川書房（8/15刊・¥850）

"SF"という前提でヴィアンを読んでも、おそらく期待外れに終わるだろう。例えば、SFに分類される短編「クラシックは危険」など、それだけ読んでも、面白くもなんともない——だが、この短編集の一編であるがゆえに、価値が出てくるのだ。

本書は、全十三巻のヴィアン全集中、唯一の短編集である。

「蟻」は、戦場に赴いた一人の兵士の物語。主人公の感性は極端に風化しており、場違いな無感動さで、戦争が描かれている。一方、「ホノストロフへの旅」は、無口な列車の同乗者に、他の客が残虐性を剝き出しにする、という一編。「良い生徒たち」「のぞき魔」などにも、同様の雰囲気がある。——ブラック・ユーモア作家と、一般に称されるヴィアンである。けれども、狼男に噛まれ、満月の夜、人間に変身するようになった狼の話「人狼」や、安物の恋愛小説を読んだせいで、調子の狂ったロボットの話「クラシックは危険」などに、不思議なやさしさが感じられるのだ。ヴォネガットを見てもわかるが、両極にあるようで、ブラック・ユーモアとやさしさとは意外に近い関係にあるのかもしれない。（俊）